

たまのよこやま

縄文でワクワク体験

東京都埋蔵文化財センター
創立30周年記念

縄文ワクワク体験まつり

5月3日(月)・4日(火)
午前10時から午後4時まで

参加自由 無料

遺跡庭園「縄文の村」にて

体験コーナー

1. カルミ割り体験
2. 縄文コレクション
3. 勾玉作り体験
4. 矢じり作り体験
5. 石斧で木を切る体験
6. 火起こし体験

※要付で「ドングリ」7粒を袋に入れてください。
ドングリ1個につき1つの体験ができます。
好きなコーナーで縄文体験にチャレンジ!

「縄文の村」スタンプラリー

※裏面のスタンプシートを使ってください。
※雨天、荒天時は開催が変更になる場合があります。

連絡先：東京都埋蔵文化財センター 042-373-5288



カルミ割り体験



勾玉作り体験



矢じり作り体験

5月3・4日の連休中の両日、多摩センターこどもまつりと
のジョイントで、創立30周年記念事業「縄文ワクワク体験まつり」
を開催しました。センターとしては初めての事業ということもあって、
どのようになるのか見当もつきませんでした。会場となった遺跡庭園
「縄文の村」は、好天に恵まれ終日多くの参加者で賑わい、終わって
みれば2日間で千名を超える盛況ぶり。遺跡庭園では、これまでに
見たことのないの Joyful な光景が繰り広げられました。

参加者は会場の受付で、ドングリ7粒が入った袋とスタンプ
ラリー用のシートを受け取り、ワクワク体験のスタート。ドングリ1
個と引き換えに1体験ができます。参加できる体験は、カルミ割り
体験、縄文コレクション、勾玉作り体験、矢じり作り体験、石斧
で木を切る体験、火起こし体験の6種類。それに隠れメニューとし
て縄文輪投げを設定しました。これまでセンターが年間を通して
実施してきた体験教室の集大成とも言うべきイベントです。

まず入口を入ってすぐにカルミ割り体験。カルミをわざわざ
割って食べるなど普段めったにやらないこと。縄文人も使った
石皿の上でカルミを割ります。カマかせにたたくとカルミも粉々、
微かな力加減が結構難しい。

藤棚の下では、縄文服を集めた縄文コレクションを開催しま
した。お気に入りの縄文服とアクセサリーをチョイスして試着。
カメラの前で、はいポーズ。みんな笑顔が最高。

今回の一番人気が勾玉作り。グリーンテント下のテーブルで
は、一回に20人ほどの参加者が滑石を懸命に削って勾玉作り。
制作に30分くらいかかることもあって、あっという間に順番
待ちの列、あわてて整理券を発行。2日間で400名がオリジナル
勾玉作りに参加していただきましたが、「時間がなくてできませ
んでした」という方も多くでございました。ごめんなさい。



ブルーシートの上では、黒曜石を使った矢じり作り。作り方の簡単なレクチャーを受けた後、軍手とゴーグルを付けて準備完了。鹿角で懸命にたたきますがなかなか思った形にならず悪戦苦闘。縄文人の技術力の高さに改めて感心することしきり。

火起こしも人気ベスト3に入る定番体験。用意された8台の火起こしセットは常に満席状態で、親子で協力しながら次々に煙が上がっていきます。大きな火になると一斉に歓声と拍手が上がる。これで今日から君も火起こしマイスター。

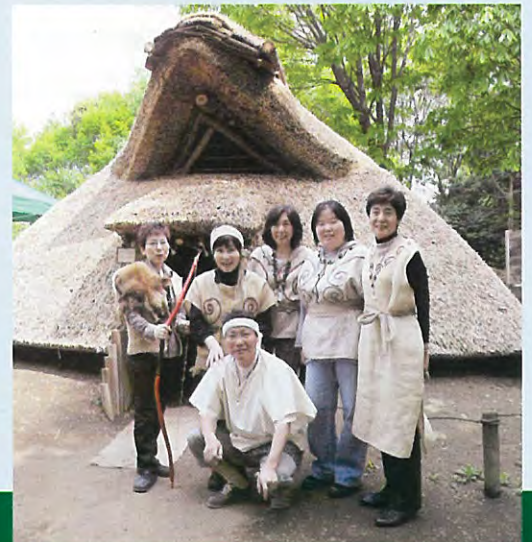
体験コーナーとともに園内ではスタンプラリーも同時開催。8ヶ所のオリジナルスタンプを探して景品をゲット。今回は火起こしマーク入りのオリジナル金太郎飴5個入りセットを700セット用意しましたが、初日で450個がはけてしまったので、急遽2日目分は3個入りセットに変更しました。

一千人もの人がワクワクしてくれた2日間。スタッフは昼食も取ることができない忙しさでしたが、「楽しかったです」という参加者の声に後押しされながら、何とか無事終了。次回の開催にもご期待下さい。

(小葉)



上) 火おこし体験
下) 縄文ファッション



みんな 楽しかったかな？

毎年4月から6月にかけては、小学6年生の社会科見学の季節です。この間、埋文センターの平日は連日、朝から子供たちの元気な声が響いています。

小学校での歴史の授業は6年生から始まりますが、本年度までの教科書には旧石器時代と縄文時代がなく、日本の歴史はいきなり弥生時代から始まっています。縄文時代はちょっとしたおまけのような記載があるだけです。考古学という学問を少しでもかじった経験があるものには、とても寂しく感じていました。

「せめて歴史はちゃんとやろうよ、文科省さん」って声が届いていたかどうか分かりませんが、教育指導要綱が改訂され、来年度からは本格的に縄文時代から始まるとのことで、嬉しいと思います。

となると、今度は小学校の先生たちにとって、歴史の授業を進める上で、またいろいろ考えて組み立てていかなければなりません。

そこで登場するのが、東京都埋蔵文化財センターです。歴史の授業をサポートするには、埋文センターほど身近で最適な施設はないと思います。展示ホールや体験コーナー、縄文の村それぞれで専門の職員の解説があり、子供たちが飽きないような様々な工夫が凝らされていて、しかも施設の利用は無料、となれば言うことなしです。

ありがたいことに、ここ数年、社会科見学にいらっしゃる小学校は少しずつですが増加しています。昨年度の4月から6月に来館された小学校は約90校で児童数は約7,300人でしたが、今年度の同時期では、約100校あり児童数は約8,800人でした。昨今言われている少子化の影響で、少なくなるかとも



人気の体験コーナーは超満員

予想していましたが、いい意味で外れてくれました。

ただ、昨年度の児童数から大幅に少なくなってしまった小学校も見うけられ、「少子化」という言葉の重みを感じる日もあります。

私たちは、子供たちに「歴史に興味を持ってくれたらいいな。嬉しいな。」と思いつつ、

「ここはこうしたらいいかも・・・」



晴れても雨でも、縄文の村は気持ちいい

「説明は少し短くした方がいいかなあ・・・」

などと自問自答を繰り返しながら、見学のお手伝いをさせてもらっています。

何よりも、子供たちが自分たちの知っている世界以外のことを初めて知る時のその反応は、言葉では表せないほど輝きに満ちていて、いつも驚かされます。そして、そんな子供たちに元気を貰いながら仕事ができる幸せに感謝しています。

東京都埋蔵文化財センターに社会科見学に来た子供たちの中から、将来、考古学や歴史学の大家が出てくる日を信じて、見学案内に取り組んでいます。

(並木)



展示ホールでは、本物の土器に興味津々

復原住居の建替え

前編



建替え前のB棟

この春、遺跡庭園「縄文の村」にある3棟の復原住居のうち、B棟の建替え・C棟の葺替えが行われました。このうち、B棟の建替えの様子についてご紹介しましょう。



「縄文の村」が開園したのは昭和62年。この春で23年が経ちました。縄文時代前期前半（関山期）の住居を復原したB棟も、約四半世紀の風雪にしっかり耐えてきましたが、最近では柱の根が痩せて、屋根が正面から見てやや右側に沈んでいました。



根元が痩せてしまった柱（解体時に撮影）

竪穴住居の耐用年数については諸説ありますが、20～30年とする説によれば、ちょうど建替えの時期ということになります。また、解体時に茅を外して分かったのですが、茅葺きの下はネズミの良い住処になっていたようで、窮鼠痕のあるクルミが多数集められていました。どうやら、柱の根が痩せた原因は、木そのものの腐食に加えて、ネズミがかじっ



根元の朽ちた垂木と集められたクルミ（解体時に撮影）

たこともあるようです。（余談になりますが、近年幾度か聞かれた「庭園でリスを見た」という話も、どうやら、その正体はネズミ君のようです。）

建替えは、1月末の解体に始まりました。垂木材などで、再利用可能なものを選び、補充が必要な材を調達します。今回用意された構造材は、柱用の皮付きクリ材24本（末口径8～12cm）、垂木等に用いる皮付きの雑木（末口径8cm、エノキ・ケヤキ等）35本です。屋根材で最も多量に用いるのは茅。茅とは、ススキ、チガヤ、スゲ、ヨシ、オギなどの総称で、場合によっては稲藁なども用いられますが、それぞれに耐久性も異なります。今回用いたのは、乾いた土地に生育する山茅の中でも良質とされるススキ（御殿場産）です。ちなみに、茅は青いうちに刈ると痛みやすいので、枯れて黄色くなる12月～3月頃に刈り取ります。茅葺き面積64㎡に対して、径20～25cm・長さ1.8m以上の束が640束用意されました。この他に、垂木用の径3cm程度の竹16本、茅を抑える径1.5～2cmの押鉾竹等120本（滋賀産で3年生以上）、棟用のヒノキ丸太（径10cm程度）4本、60cm四方の杉皮30束（奈良・吉野産）、垂木等を結束するための荒縄・棕櫚縄・藤弦（一部安全確保のために銅線を使用）などが用意されました。

柱等の構造を作る木工事は、2月19日～3月3日まで行われ、3月2日からは屋根葺きです。

（長佐古）

6～7頁には、定点カメラで撮影した建替え前半の様子を示してあります。サイズを同じにしてありますので、次号の分と併せて切り分けると、パラパラ漫画のようになるはずです。





シリーズ 多摩の縄文 アらかると

— 縄文人のこころ —



今回は考古学が最も不得手とする縄文人の精神、心情について二題。

その1 今年度の展示のメインとして、リアル縄文人に登場していただいた(写真)。やはり縄文人のイメージとしては、果敢にも弓矢で狩りをする姿が想起され、現代人はこれを「肉食系縄文人」と呼ぶ。弓矢の発明は縄文三大発明の一つで、これによって狩猟技術が飛躍的に発達したので、きわめて縄文的といえる。

ところで、現代の男性は、「つまらないロマンとくだらないプライドで生きている」と思う。そしてその祖形が、まさにこの肉食系縄文人に求められることをご存知だろうか。狩猟本能の中にあるイノシシに対する慈しみと、家族や彼女に対して獲物を持ち帰らなければならないという、あるいは女性を守ろうとする確信的なプライドが、男としての立場を堅持させてくれる。ただし悲しいかなこのくだらないプライドは、目的が達せられない時とも簡単に砕け散るが、かろうじて生き残るロマンが崩れかけたプライドを支えてくれる。プライドはいつも邪魔にしかならないが、またこれ無しに男は生きていけない。ただし女性はこれを理解できない。

一方女性は、「スーパーな現実ときらめく愛で生きている」と思う。その背景には、子供を生んで育てなければならないという過酷な現実と、それを守るための献身的な愛が必要となる。縄文時代の女性を堅実なドングリ拾いに駆り立てるのは、この過酷な現実を乗り越えるための知恵とそれを支える愛に生きる姿に他ならない。ただし男はその愛に必ずしも答えていない。

縄文人の代表として肉食系縄文人を示したが、実際のところ狩りによる獲物はなかなか期待できない。現実的に縄文人のメインデッシュになっていた

のはドングリであり、それを支えていたのはまさに堅実な女性人。その意味からも正確には肉食系縄文人ではなく、「ドングリ系縄文人」と表現するのが正しいところかもしれない。しかしここはあくまでも男性陣を立てて肉食系縄文人とさせておいてあげてください。

その2 日本の気候の最大の特徴は、四季があること。そしてその季節は、今日から夏、明日から冬と急激に変化するのではなく、いつの間にか気がついたら春になっていた、というようにあくまでも少しずつ徐々に移り変わっていく。この緩やかな気候の変化が、日本人の性格に大きく影響している。つまりこの徐々に変化する様子が、YesかNoかという直截的な判断ではなく、あいまいでファジーなき

わめて優柔不断な日本人特有の感性を生み出していたとは言えないだろうか。そしてこの優れた優柔不断な感性は、縄文時代にまでさかのぼることができることに気がつく。

縄文時代の始まり頃とされる1万5千年前頃から気候の温暖化が進み海面が上昇し、大陸から切り離された日本列島が形成される。列島となった日本海側には、対馬海流の暖流が流れ込み、それまでの草原と疎林の多い乾燥した大陸型の気候風土から、降水量が多く湿潤の海洋性の気候へと徐々に変化し、気候変化に富み地域差が大きい日本独自の四季が生まれる。この時代がまさに縄文時代であり、この四季の変化の中で、春は山菜、夏は漁、秋は採取、冬は狩りといった自然と一体となった縄文生活が育まれた。

日本人特有のファジーな感性と男女の違いの祖形は、まさにこの縄文時代に求めることができる。単に縄文時代が古いというだけでなく、現代にまでその感性が脈々と受け継がれていると思う時、より縄文時代が身近なものとして感じられてくる。

こんなことは教科書では一切教えてくれないが、もし少しでも日本人を知りたいと思う時、きっと縄文人が雄弁に語ってくれることであろう。(小薬)



「たまのよこやま」の由来 万葉集巻二十之四四一七の防人となった夫の旅立ちに備えて、山野で馬に草を食べさせていたところ、馬は逃げてしまった。やむなく徒歩で多摩丘陵を越えることになってしまった夫を見送る妻の嘆きを詠った「赤駒を 山野に放し 捕りかにて 多摩の横山 徒歩ゆか遣らむ」(宇治部黒女) を由来としています。



たまのよこやま 81

2010年6月30日発行

東京都埋蔵文化財センター 〒206-0033 多摩市落合1-14-2 TEL 042-373-5296 <http://www.tef.or.jp/maibun/>